

◆**単元名**：第1編 世界と日本の地域構成 第2章 日本の地域構成

③「日本の領土をめぐる」(教科書 p.24-25)

◆**本時の目標**：北方領土、竹島と尖閣諸島について、日本と周辺国との間に領土をめぐる問題や課題が生じていることを理解させる。／北方領土、竹島と尖閣諸島について、具体的な位置関係を把握するとともに、問題や課題の歴史的背景について関心をもち、調べようとする態度を養う。

□指導にあたって：

教科書 p.24 の資料③を活用した、北方領土の歴史を学習する場面では、ぜひ具体的な地域の資料を紹介したい。一例として、北海道根室市が作成した動画資料などのさまざまな情報から、第二次世界大戦の終了後、北方領土をめぐる何が起きていたかを具体的に知ることは、いままも続く領土をめぐる問題やその解決について、生徒が考えていく一つのきっかけにもなるだろう。根室市に残る「陸揚庫」は、かつて根室が北方領土とつながっていたことを示す、本土に残る唯一の歴史的建造物であり、令和3年には国の登録有形文化財(建造物)に指定されている。根室市では、広く北方領土啓発事業等へ活用することを目的に、公式サイト中にこの「陸揚庫」に関する解説コーナーを設け、ソ連軍の侵攻と占領をリアルタイムで伝えた歴史について紹介している。



▲根室市公式サイト

【根室国後間海底電信線陸揚施設(通称・陸揚庫)】

1929(昭和4)年9月に旧逓信省より建設された、根室国後間海底電信線陸揚施設(通称・陸揚庫)は、根室側の陸上線と国後島へ延びる海底電信線(ケーブル線)を接続する中継施設でした。かつて北方領土に日本人が住んでいたころ、この陸揚庫から延びた海底電信線は、国後島を経由して、択捉島までつながっていました。島民の暮らしやサケマス漁業などの産業を支える通信インフラとして、島々の発展に大きな役割を果たしていました。

根室と国後の間に敷設された海底通信線は英国製で、その構造は、中心に二本の導線があり、導線の周りをゴムで覆い、その外側を約1cmの麻のような繊維で覆っていました。さらに外周に、一本約5mmの鉄線十三本を用いて保護していました。

第二次世界大戦後にソ連軍が北方領土に侵攻した直後には、上陸したソ連軍の略奪行為による恐怖と不安で緊迫する島々の状況が、この陸揚庫と電信線を通じて、電報や電話で根室側に伝えられました。

本施設は、かつて「北方領土に日本人が住んでいた」ことを示す証拠であり、当時の姿を残す、数少ない非常に貴重な建物です。また、「北方領土が日本の領土」であることを国内外に発信していくことが重要であることから、2003(平成

25)年に根室市が施設と土地を所有者より購入し、保存・整備を行っています。(＊根室市公式サイトなどを参照して作成)



▲現在も残る陸揚庫(北海道根室市)

(Uploaded a work by Ryo FUKAsawa from <https://www.flickr.com/photos/fukapon/51581388915/> with UploadWizard)